

(1)青森県南地方最大の祭り、八戸三社大祭

毎年、7月になると、町のあちこちからお祭り本番に向けて、太鼓や笛のお囃子（おはやし）の練習の音が聞こえてくる。その音を聞いて、夏になったなとを感じるものだった。私にとって八戸三社大祭は最高のお祭りであり、地元八戸の誇れる地域資源のひとつだ。華やかな山車を見ると感動し、お祭り期間の人々の熱気を感じるたびに、胸がわくわくして楽しくなる。各地からお祭りを見物するために多くの人々が集まり、市民だけではなく外から来た人々をまた元気にする、そんなお祭りである。

八戸三社大祭は、およそ290年の歴史と伝統を誇る青森県南を代表するお祭りで、国の重要無形民俗文化財に指定されている。御輿（みこし）行列や獅子舞（ししまい）虎舞（とらまい）など郷土色豊かな伝統芸能が通りを歩き、観客の目を楽しませる。そしてなんといっても祭りの華は山車。源平合戦や歴史上の英雄、童話（かぐや姫、桃太郎など）を題材にした町内会ごとの何十もの山車がある。1台に大太鼓1つ、小太鼓5つ、引き子を含め150～250人で運行していて、地元では「日本一の山車祭り」と自慢している。

(2)華やかな山車の裏での苦勞

華やかで楽しいお祭りである三社大祭であるが、実際は山車を管理する過程で多くの困難が生じたり、運営側の苦勞が多いのが現状だ。

地元八戸市の地方紙である「デーリー東北」によると、ここ数年で参加者の減少が目立つという。小中学生が部活動や習い事などで忙しくなるという理由から参加する人数が減っている。また、社会人も会社の関係でなかなか休暇を取れず、参加人数が減少しているという。八戸三社大祭は、地区ごとに有志がお金を集め、山車を制作し、運営するスタイルとなっていて、専門の制作者がいる青森ねぶた祭りなどとは異なる「市民の手作り」が大きな特徴でもある。しかし、若者の参加離れなどから山車を制作するための技術継承が危うくなっている。また、引き子が足りず、ほかの山車組から人手を確保するというケースもある¹。

また、多くの山車組の懸念になっているのが山車制作場所の確保だという。地元で用地を見つけられず、離れた場所に山車小屋を構える山車組も多い。祭りを控えた夏の時期、夜遅くまで続く作業やその騒音がネックになり、特に住宅街では敬遠されがちであるという。かつて、騒音などから地元での確保を断念した山車組の関係者は「一部の住民からでも反対があれば、受け入れてもらうのは難しい」と明かす。その一方で、地元から離れた場所に山車小屋を確保した場合、「子供の‘祭り離れ’に拍車がかかるのではないか」という懸念の声も聞かれる。

はちのへ山車振興会の一人は「今のうちに問題への対策を講じなければ、多方面に影響が及んでくる。ゆくゆくは山車組の縮小や存続問題まで発展しかねない」と不安を語る²。

(3)山車の今後

多くの問題がある山車制作だが、地域の住民との交流を深め、徐々に理解を得られつつある山車組も存在する。三社大祭を作り出すのは、制作者・運営側もそうだが、やはりなんといっても住民たちの協力が必要不可欠になってくる。三社大祭に対する、関係者と市

民の温度差がなくなる限りは、この問題は絶対に解決することはないだろう。

今年、東京ドームで行われた「ふるさと祭り 東京 2014」に八戸三社大祭が四年ぶりに出場した。実際に私も東京ドームへ見に行ってきた。大学入学後、祭り開催期間に地元に戻るが出来なかったため、3年ぶりに生で見る山車だった。東京ドームの真ん中付近に置かれた山車は、観客席の一番上から見ても十分なほどの大きさだった。近くで見ると、改めてその迫力と手の込んだ山車のクオリティに感動した。東京ドームの中へ入ってすぐのところには、ミニチュア型の三社大祭の山車が飾られており、多くのお客さんが「すごいね」といって写真を撮っていた。多くの人々が、八戸三社大祭について少しでも知ってくれたことがすごく誇らしく感じ、うれしい気持ちになった。

私は、地元を離れて過ごすまで、正直、地元の良さをあまり感じなかった。田舎だと馬鹿にするときもあった。しかし地元を離れてみて、外から客観的に地元をみたとき、地元に住んでいた時には分からなかった多くの魅力を感じ、それに気づくことができた。三社大祭もその一つだ。地元にいるときからももちろん、好きなお祭りではあったが、「本当に心の底から魅力に感じていたか」と聞かれれば、そうとは言えない。地元を離れてみて、ほかの地域でのお祭りを目にする機会があったとき、初めて自分たちの地域のお祭りは凄いのだと確信した。私だけでなく、きっと多くの人々が自分たちの地域を客観的に見ることが出来ていないと感じる。改めて地元を見つめ直してみると、自分たちが気づいていなかったり、当たり前だと思っていたものが、実はとても価値のあつて素晴らしいものだと知ることが出来る。そうやって、自分たちの身の回りの地域資源を改めて考え直し、時には形を変えたりしながら守り続けていく。そうやって生活していくことで自分たちの町をもっともっと好きになれるのではないかと思う。

「八戸三社大祭が有名になることで、日本中から多くの人々が祭りを見に来る。⇒そのことにより、地元が活気づき、地元の人々が三社大祭の価値に改めて気づき、自分たちの地域の祭りに誇りを持つようになる。誇りを持ったことにより、‘このお祭りを守っていかなければいけない’という行動につながる」。私は、このサイクルが必要だと考える。三社大祭の山車をつくる技術者や祭りの参加者、運営スタッフはもちろんのこと、市民一人一人が三社大祭に誇りを持ち、「三社大祭を盛り上げる」という思いを持つことが必要だ。そうやって市民の祭りに対する思いが変化していけば、今以上に運営側と市民との距離が近くなり、温度差はなくなっていくはずだ。そのためにも、八戸三社大祭をもっと宣伝し、多くの人々に知ってもらふ機会を増やすことが必要になってくる。

(4)八戸三社大祭に対する思い

私は、将来地元の市役所に勤めたいと考えている。特にその中でも観光課へ行き、この三社大祭を全国にPRしていくのが目標だ。

自分たちの町に素晴らしい地域資源があることを、もっと多くの人々に知ってほしいし、その地域資源を支える人々も大切な地域の資源なのだと伝えたい。

「三社大祭を成功させるために運営側と住民が一致団結して、そこから絆が生まれる。そしてお祭りを通して、運営側もお客さんも盛り上がり、笑顔が増える。地域の人々はもちろん、外部から来た観光客の人々にも楽しみの輪が広がり、つながっていく。」このように、地域資源を通して多くの人々が繋がりをあえる。そういった人と人との出会いというも

のをもっと大事にしていきたいし、それを今以上に広めていきたい。私は、地域資源にはそのような人を元気にする力や人を笑顔にする力、人と人とを繋ぐ力があるように思える。

将来、八戸三社大祭が‘青森ねぶた祭り’と同じくらい有名になるのが私の願望であり、叶えたい夢だ。そのためにも全力を尽くして、この素晴らしい地域資源である三社大祭を宣伝していきたい。

¹ 「山車組参加者の減少顕著、存続危ぶむ声も」(2013/08/05) デーリー東北
<http://www.daily-tohoku.co.jp/special/sansya/news/news2013/san130805c.htm>

² 「山車小屋はいま(中) 住民理解」(2013/07/28) デーリー東北
<http://www.daily-tohoku.co.jp/special/sansha/news/news2013/san130728a1.htm>